

〔第27回学術集会 市民公開講座〕

## 血縁を超えて広がる家族 —『アルプスの少女ハイジ』に見る家族像—

早稲田大学文学学術院

松永 美穂

スイスの女性作家ヨハンナ・シュピリ原作の『アルプスの少女ハイジ』は、日本では何度も翻訳され、1970年代にはテレビのアニメ番組にもなって、非常に親しまれている。アニメのハイジのイメージは広く流布しており、CMにも使われているほどだ。しかし、原作と比較すると、アニメでは設定がかなり変えられており、1年間の放送のためにたくさんのエピソードが付け加えられると同時に、原作のキリスト教的な要素は取り除かれていた。このアニメはヨーロッパに逆輸入されて人気を博している。しかし今回は、原作のハイジに注目し、彼女の存在が周囲の大人たちを変えていくところや、彼女が新しい家族を獲得していく過程を見てみたい。そのために、まず原作者の生涯を紹介しよう。

ヨハンナ・シュピリは1827年に、チューリヒ近郊で生まれた。祖父はプロテスタントの牧師、父は医者（外科が専門だが、他の患者も診ていた。また、自宅は病院も兼ねていて、入院患者たちがいた）、母は宗教詩人だった。ヨハンナは子どものころからいろいろな患者を間近に見てきた。『ハイジ』に出てくる医師の冷静で優しいイメージは父から来たのかもしれない。また、夢遊病患者としてのハイジの描写も、実家での体験に基づくと考えられる。

ヨハンナの初期作品には、貧しい山村の子どもたち、親にこき使われて衰弱し、医者にもかかれず死んでしまう子どもたちなども描かれている。病む人への同情の気持ちや、正しい看護の必要性を、ヨハンナは若いころから感じ取っていた。

成人したヨハンナは、ジャーナリストであり弁護



クララに歩行訓練をさせるおじいさん

(ルドルフ・ミュンガーによるさし絵)

写真資料出典：Johanna Spyri: Heidi, Lentz Verlag (Originalausgabe illustriert von Rudolf Mürger)

士、さらに地方政治家の仕事もしていた男性と結婚し、一人息子を生む。しかし、夫が働き過ぎで家庭を顧みないうえに、上流階級同士の付き合いも負担になったらしく、彼女は鬱病を患ってしまう。この鬱病から抜け出すまでに、9年くらいかかったらしい。

彼女の一人息子は病弱で、結核を患っていた。シュピリは息子の転地療養につき添い、マイエンフェルト近郊に行ったことがきっかけで、そこを作品の舞台に選んでいる。いまではこの地域は「ハイジランド（ハイジの土地、故郷）」という謳い文句で、観光客を誘致している。

まず、「癒やし」ということに注目して、ハイジの物語を見ていきたい。ハイジの祖父は放蕩で財産

を失い、外国の傭兵となった。妻を亡くし、一人息子を連れて帰郷するが、成人して大工となった息子は結婚後に事故で急逝する。その息子の子どもがハイジだが、息子の妻（ハイジの母）も夫のあとを追うように死んでしまう。ハイジは母の実家に引き取られるが、ハイジの祖父の方は息子たちに不幸が起こったことを「おじいさんの罪のせいだ」と噂され、村人に対する不信感ゆえに一人で山に籠もっている。その祖父が、ハイジを引き取らざるを得なくなって後、共同生活を通して心をほぐされ、優しい人になっていく。隣人の家族とも交流が途絶えていたのに、その小屋がぼろぼろになっている話をハイジから聞いて、修理をしに出かける。このように、冒頭部分ですでに、祖父の心に変化が起こっていることに注目したい。

しかし、祖父が決定的に変わるためには、ハイジが一度、フランクフルトに連れ去られるできごとが必要だった。なぜ自分が行くのかもわからず連れていかれたハイジ。同じドイツ語圏とはいえ、ブルジョア家庭では言葉遣いも生活習慣も違い、足の悪い娘のクララに合わせて屋敷に幽閉されるような生活を送っているうちに、ホームシックになる。不満を言うことも許されず、自分の気持ちを抑え込んでいたために、最後には夢遊病の症状が出る。

フランクフルトでのハイジは、物質的には何不自由なく暮らしているが、精神的なケアが受けられず、追い詰められた状態におかれている。クララの祖母が理解者となってくれるが、祖母は遠方で暮らしており、家政婦長のロッテンマイヤーという管理者はいるけれど、家族としての温かみはない。そんななか、夢遊病で夜中に徘徊するようになったハイジは、医師の診断の結果、ただちにスイスに帰ることになる。ハイジが山に戻り、走って祖父の小屋を目指す場面は感動的だ。

ハイジを取り戻したことが、祖父にも大きな変化をもたらす。自分から教会の礼拝に出席し、牧師館のドアをたたいて、これまでの非礼を詫げるのだ。謙虚に和解を求めるこの姿は、年を取っていても人

間は変わることができるし、共同体にも復帰できる、という希望を読者に与える。また、祖父が変わったことで、ハイジも村の学校に通えるようになり、その変化はさらに、文盲だったヤギ飼いペーターがついに文字を覚えるきっかけにもなる。

では、ハイジの物語のなかで最も有名な、クララの癒やしの場面はどう描かれているだろうか。

クララはスイスにやってきたとき、初めての経験に夢中になる。原文には、「クララは生まれてからいままで一度も、このような体験をしたことはなかったのです」という表現がくりかえし出てくる。長距離の旅行もそうだが、戸外で食事をする、絞ったヤギのミルクを飲むこと、干し草のベッドで寝ること、すべてが初めてだった。不便さを感じることもなく、楽しくて時間が飛ぶように過ぎていく。そのなかで、ハイジの祖父がクララにさまざまな配慮をする様子が、病院で育ったシュピリの目を通して、詳しく語られている。クララの祖母はすぐに、ハイジの祖父に看護の心得があることを見抜く。そして、「あなたがどこで看護の心得を学ばれたのかがわかれば、わたしはきょうのうちにも、知っている看護師たちをみんなそこに送り込んで、あなたと同じことができるようにします。いったいどうして、看護がおできになるのですか？」と尋ねる。ハイジの祖父は、傭兵時代に怪我をした部隊長の看護をした経験があり、その経験がいまに生きているのだった。

彼は山に滞在するクララに基本的な体力をつけさせ、少しずつ、立ち上がる練習を始めていく。そして、自立したい気持ちが強まったクララは、車椅子を壊されたことをきっかけに、歩けるようになる。クララの回復をみんなが喜び、クララの父と祖母は感謝にあふれ、ハイジへの経済的サポートを約束する。

さらにあと二人、登場人物で注目したい人物がいる。一人は医師のクラッセン先生。子ども向けにリライトされた「ハイジ」の物語では省略されがちであるが、先生は一人娘を失った直後にスイスにやってきて、山の自然と、ハイジや祖父との交流によっ

て心を癒やされる。医師が患者を癒やすだけでなく、医師がかつての患者に癒やされる、という意外な展開があるのだ。クラッセン先生は最後にはスイスに移住し、ハイジを養女とする。

原作にはいろいろな「癒やし」の物語が仕込まれている。最後にペーターの祖母を見てみよう。彼女は目が見えず、住んでいる小屋から一歩も出ることはない。部屋で糸を紡ぐか、体の具合が悪くてベッドに横になっているかのどちらか。その彼女も、ハイジと出会うことで慰められ、ハイジを愛するようになる。またハイジの方も、彼女を助けることに生き甲斐を感じる。互いに与え合う二人の交流は印象的だ。

本書に出てくる家族は、片親だったり、両親のいない家庭だったりする。しかし、血が繋がっているかどうかに関係なく、人々のあいだに家族的な温かい交流が生まれている。ペーターの家族とハイジの家族。クララの家族とハイジの家族。そして、クラッセン先生。「喪失」を抱える家族が、新たなつながりを見出し、緩やかに繋がっていく姿は、現代においても大きなヒントになる。また、親世代が欠けている代わりに、祖父母の世代が重要な活躍をする。細やかな人間関係、家族関係のなかで、人々が成長していく話として、大人が読んでも教えられるところが多い。また、子どもは単に保護されるべき対象ではなく、この話のなかでは大人たちを癒やし、開眼させる存在でもあることを強調したい。

(原書からの翻訳は筆者自身による。)

## 文 献

- Büttner, P./川島 隆: ハイジの原点, 郁文堂, 東京都, 2013  
 ちばかおり・川島 隆: 図説 アルプスの少女ハイジ, 河出書房新社, 東京都, 2013  
 ちばかおり: ハイジが生まれた日, 岩波書店, 東京都, 2017  
 河村英和: 観光大国スイスの誕生, 平凡社, 東京都, 2013  
 松永美穂: シュピリ アルプスの少女ハイジ (NHK 100分de名著テキスト), NHK出版, 東京都, 2019  
 南 はるつ: ヨハンナ・シュペーリ作『ハイジ』の研究 (Ⅲ), 東京音楽大学研究紀要, 25: 145-162, 2001  
 南 はるつ: ヨハンナ・シュペーリの生涯と作品考察, 東京音楽大学研究紀要, 35: 103-125, 2011  
 森田安一: 『ハイジ』の生まれた世界, 教文館, 東京都, 2017  
 踊 共二: 図説 スイスの歴史 (ふくろうの本), 河出書房新社, 東京都, 2011  
 小倉欣一・大澤武男: 都市フランクフルトの歴史, 中央公論社 (中公新書), 東京都, 1994  
 瀬原義生: 精説スイス史, 図書出版文理閣, 京都府, 2015  
 Spyri, J.: Heidi, Lentz Verlag (Originalausgabe illustriert von Rudolf Mürger), ドイツ連邦共和国シュトゥットガルト, 発行年不明  
 Spyri, J./上田真而子: ハイジ (上), 岩波書店, 東京都, 2012  
 Spyri, J./上田真而子: ハイジ (下), 岩波書店, 東京都, 2011  
 Spyri, J./田中紀峰: ヨハンナ・シュペーリ初期作品集, 夏目書房新社, 東京都, 2016  
 Spyri, J./松永美穂: アルプスの少女ハイジ, 角川文庫, 東京都, 2021  
 たかはしたけお: ハイジの贈りもの, いのちのことは社フォレストブックス, 東京都, 2015  
 Wissmer, J. M./川島 隆: ハイジ神話, 晃洋書房, 京都府, 2015